

あとがき

昨年(昭和41年)の3月4日、朝日新聞は、「石井式を考える」という表題の社説を掲げました。その中で、次のように論じています。

国字国語問題は、この20年間、大きな改革の波をかぶった。人によって、それを混乱と言い、百花齊放せいほうというが、ともあれ、20年間の実績と体験とは、この問題にいくつかのルールをしいたことはたしかである。そして、それらの一つに、遠い遠い将来は別として、われわれの時代においては、やはり「漢字、カナまじり文」が原則であるということ、それを現代の機能化された社会に、どのように生かし、かつ適合させるか、ということが大きく課題として浮かびあがって来ている。

(中略)

しかし、一方においては、それらの結果として、若い人たちの国語力の低下が叫ばれている。「やがて漱石や鷗外が読めなくなる。いや、現に読めなくなりつつある」との声は、しばしば耳にする。新装の各種文学全集が、原文を新カナ、あるいはよりわかりやすい言葉づかいや、ルビ付きなどにしてしているのは、現代が、国語問題の点から見る時、過渡時代にあることを物語っている。

国字国語の能率化、簡素化と、伝統的な文化遺産としてのそれとの間に、いかにして調和と均衡を保つか。今日の国語問題はそこに焦点をしばることができよう。そして、いわゆる“石井方式”は、この問題解決へ、一つの考える素材を提供しているように思われる。

このような書き出しで、“石井方式”のねらいや効果について紹介し、国字国語問題について、国民的体験を生かした「現実的な処理」を要望する、と言って八枚にわたるこの論文を結んでいます。

私が、いわゆる“石井方式”を提案したのは、昭和27年の全日本国語教育協議会の席上でしたから、それはもう15年も昔のことになります。その後、昭和36年には大岡昇平、山本健吉、福田恆存の三先生によって世に紹介され、昭和39年には吉田富三先生によって、国語審議会に、「石井方式を国として検討すべきこと」が提案されました。

このような多くの先生方の御援助にもかかわらず、“石井方式”が教育の現場では一向に取り上げられない時に、朝日新聞から、社説として、この問題の重要性を指摘して頂けたことは嬉しいことでした。

この一年間に、石井方式を実施する学校はふえました。とは言え、それはまだ一万分の一にも当たらない数でしょう。しかし、世の流れが今変わりつつあることは、はっきり感じられます。国字国語問題の重要性、とりわけ、漢字教育の重要性は、政府でもはっきりと認めており、強力な施策がほどなく実行されることと思います。この時に当たって、本書が刊行され、広く利用されるならば、国字国語問題における憂慮すべき今までの状態は、一挙に解決されるでしょう。

国字国語問題は、どこの国においても重要な根本問題とされています。国語教育は、どこの国においても、最も重視されている教科です。どんな教科学習でも、読み書きによらないでは進めることができないからです。すぐれた読み書き能力により、あらゆる学問が能率的に進められるのです。その鍵となっているのが、わが国では“漢字”です。この“漢字力”を養うのが何

にも増して重要先決であるのに、これを怠っていたのは愚かでした。

世界的な数学者として有名な岡潔先生は、漢字軽視の今までの風潮を大変に心配なさっていらっしゃいました。「こんな貧弱な漢字力では、数学はできない」「こんなことでは、日本の文化は滅びる」とたびたび警告されています。幸い、本書によって、学生諸君はもとより、広く社会人の方々も、漢字力を養って下さるならば、わが国の文化発展のために、これほど喜ばしいことはないと思存します。

著者

館長注記: 原文は縦書きであるが、横書きに変更している。また、漢数字での表記の多くを算用数字に変更している。